
ニューヨーク1997







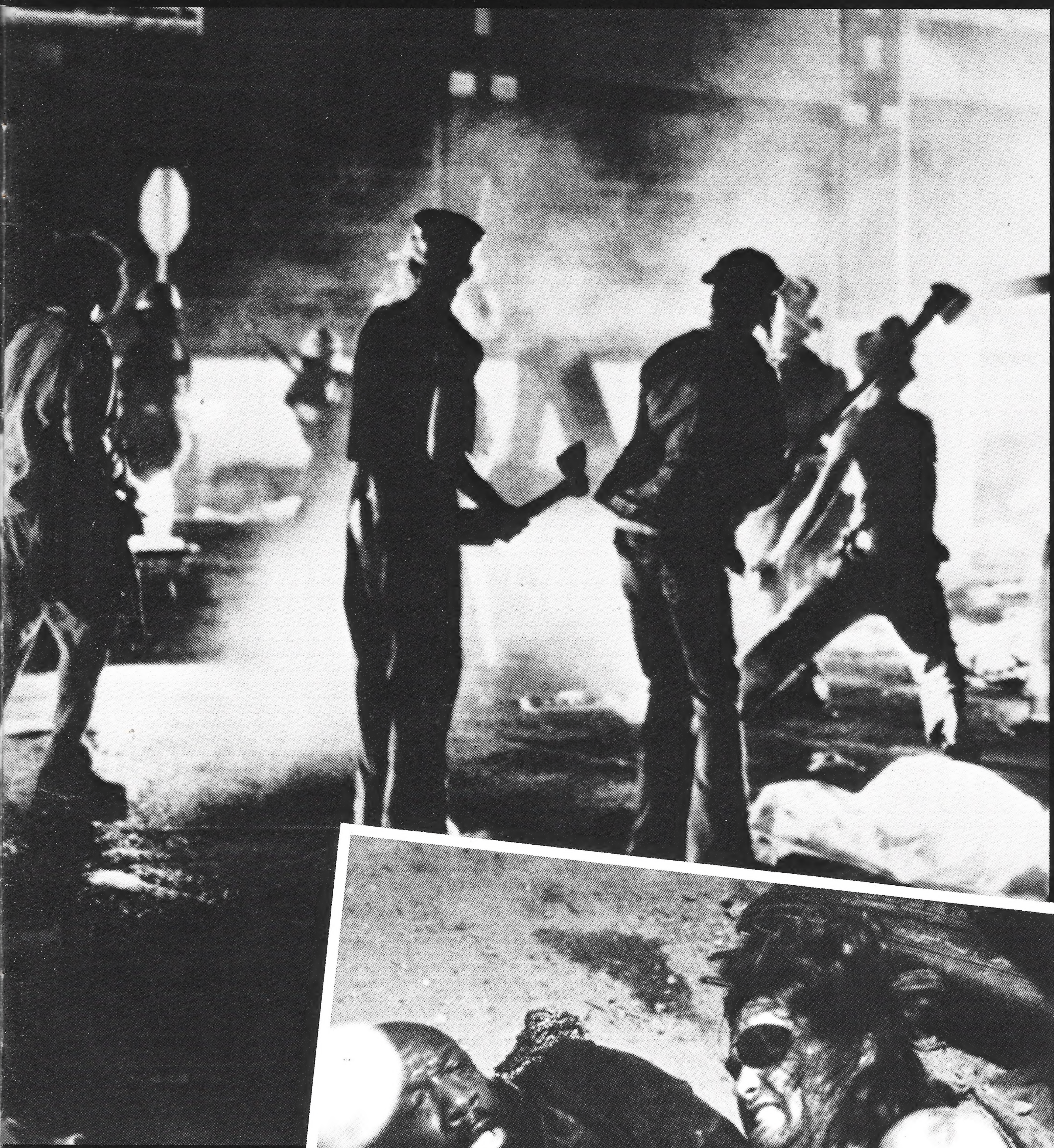
JOHN CARPENTER'S

ESCAPE FROM NEW YORK

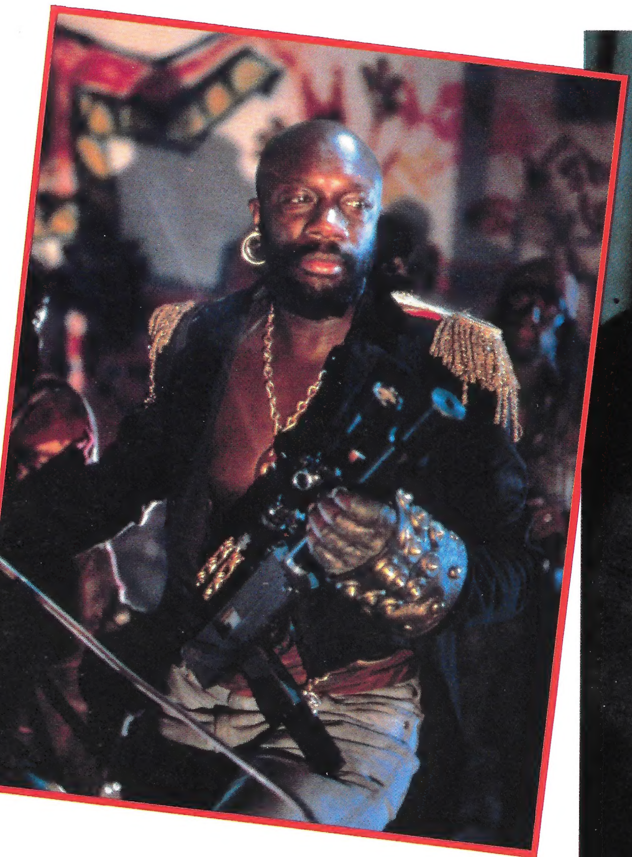
アメリカ映画　1981年度作品
〈カラー作品〉　パナビジョン

日本ヘラルド映画 Herald DOLBY STEREO™
IN SELECTED THEATRES

ニューヨーク1997















解説

ニューヨークを描いた映画は枚挙にいとまがない。何が起きるか分からない街，何が起きても不思議のない街。そして底知れぬ魅力に溢れた街。映画の舞台としては最適だ。かつてあらゆるジャンルの映画がここを舞台に作られ，今後も作られ続けるだろう。だが，これほどまでにニューヨークを“冒瀆”した映画があったろうか。

1997年。ニューヨーク・マンハッタン島は巨大な監獄となった。四囲は見上げるばかりの壁が巡らされ，島へ通ずる川，水路には殺人電流。自由の女神は何と監視塔。脱獄は全く不可能だ。そして，全米300万の囚人が挑発的なギラギラファッションに身を包み，刹那的バイオレンスに明け暮れている。このＮＹプリズンのド真中に不時着した大統領専用機。大統領救出のために送り込まれた犯罪の帝王スネーク。彼に許された時間は24時間……。

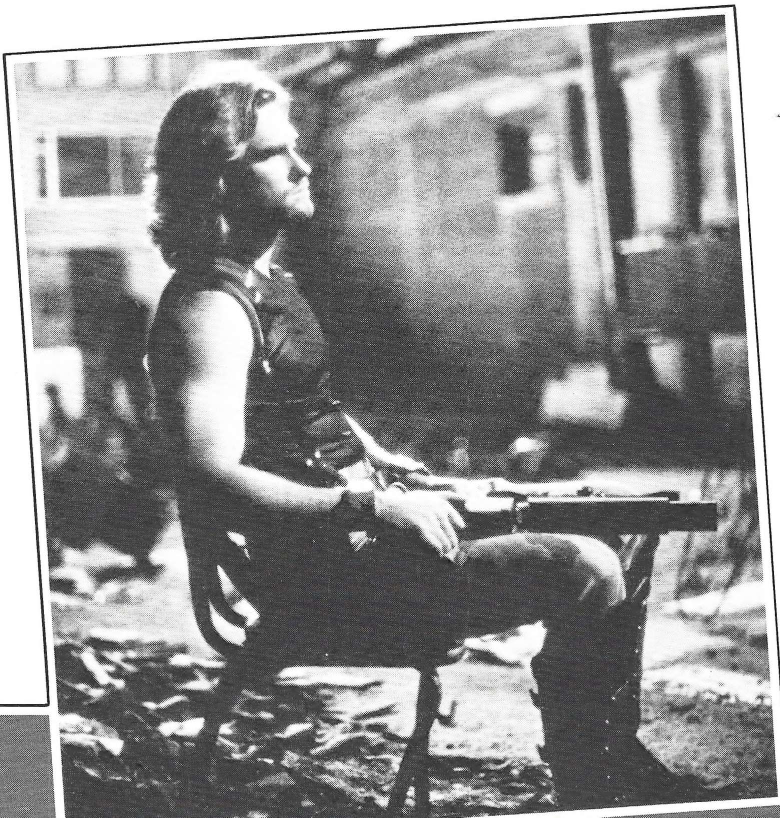
近未来，世紀末のデカダンなニューヨークを舞台に，大胆不敵，奇想天外な設定で展開するサスペンスアクションがこの「ニューヨーク1997」だ。

監督は，ジョン・カーペンター。「ハロウィン」「ザ・フォッグ」で映画ファンの好奇心を満たしてくれた彼は，1948年，ケンタッキー州生まれ。U・S・C映画学科在学中に短篇「ブロンコ・ビリーの復活」を撮り，アカデミー短篇賞を受賞する。初の長篇は「ダーク・スター」。「エイリアン」原案，脚本のダン・オバノンと共に製作したＳＦパロディーで，幻の名作として名高い（日本公開が待たれていたが，5月12日〜18日まで文芸座で開催される『ぴあ FILM FESTIVAL』での公開が決定した）。その後，「要塞警察」（日本ではＴＶ放映）「ザ・シンガー」などを手がけ，「ハロウィン」で一躍名を馳せ，「ザ・フォッグ」，そして，この作品へと続く。彼の多彩な才能は定評があり，今回も共同脚本，音楽も担当している。

製作は「ハロウィン」「ザ・フォッグ」でもカーペンターと組んだデボラ・ヒルとチーフ助監督でもあるラリー・フランコ。カーペンター作品としては破格の1000万ドルを投じ，彼の新たな才能を開花させている。

主演は「ザ・シンガー」でプレスリー役を演じ，最近では「ユーズド・カー」にも出演しているカート・ラッセル。今回はアウトロー，極悪人スネークを演じ，異様な迫力を出している。他の出演者は「ハロウィン」にも顔を出していたドナルド・プレザンス，「ザ・フォッグ」のアドリエンヌ・バーボー，「ブラックホール」のアーネスト・ボーグナイン，ソウルの帝王アイザック・ヘイズなど。

（上映時間１時間39分）



物語

1997年。世紀末。21世紀への希望的展望はなく，国際情勢も相変わらずの「頭上に吊るされたダモクレスの剣」により辛うじて“恐怖の均衡”を保っているが，決して楽観は許されない。カオス。人々の暮らしも末期的文明病に犯され退廃し，かといって，19世紀のような文化的昇華も見られない。デカダンス。そして，バイオレンス……。

ここはニューヨーク。つい15年程前までは世界中の若者たちの憧れの的だったこの街も，今や荒廃し，何と監獄と化していた。マンハッタン島の四囲は見上げるばかりの壁が巡らされ，島へ通ずる全ての川，水路には殺人電流が流れ，橋という橋には地雷が埋設されていた。上空には常時ヘリコプターが数条のスポットを引きながら，旋回している。そして，あの自由の女神は監視塔。「リバティーアイランド・セキュリティー・コントロール」と名を変え，刑務所長ボブ・ホーク（リー・バン・クリーフ）らの職員が常駐している。

この想像を絶する巨大な監獄には，全米３百万の囚人が放たれている。横縞囚人服，坊主頭なんていやしない。挑発的なギラギラファッションに身を包み，それがまた，デカダンなムードと奇妙にマッチしている。

“素敵”なオカマが男を誘えば，ストリートギャングが行き過ぎる。マジソン・スクエア・ガーデンではデスマッチが行なわれ，何千もの囚人が目を輝かせる。脱獄は不可能。食糧は月１度，セントラルパークに投下されるだけ。夢も希望もありゃしない。刹那的なバイオレンスに生きる囚人たち，異様な迫力が街を包み込む。

無機質な闇が支配するある夜，大統領（ドナルド・プレザンス）専用機が，過激派によってハイジャックされた。そして，こともあろうに専用機は，マンハッタンのド真中に不時着したのだ。国家の存亡に関わる重要書類を携えた大統領。彼を取り囲む血に飢えた囚人の群れ，群れ。こんな“チャンス”を見逃すはずがない。

監獄きっての凶悪ストリートギャング“ジプシーズ”。デューク（アイザック・ヘイズ）を首領とする彼らは，大統領を捕虜とした。そして，米政府に対して要求を叩きつけた。「３百万全囚人の即時釈放」。何たる大胆不敵な要求！　それに対し政府は，これまた驚くべき対抗手段を講じた。

スネーク・プリッスケン（カート・ラッセル）。３百万の囚人も恐れ戦く犯罪の帝王。頭脳明晰，沈着冷静，動作敏捷な極悪人。黒いアイマスクで片目をおおい，長髪をかき上げ，銃を構える姿は，ダンディズムさえ漂わせる。

そのスネークが大統領救出の任に当たることになった。何故彼が？　理由は簡単だ。釈放を交換条件に大統領を救出すべく，彼が選ばれたのだ。そして彼の頸部には特殊なニトログリセリンが打ち込まれた。24時間以内に大統領を救出しない限り，炸裂する，というわけだ。時間との闘い，不可能への挑戦が始まった。

スネークはグライダーでマンハッタン入りした。着陸地点は世界貿易センタービルの屋上。彼はそこから狂気の街に降り立った。彼を待ち構えていたのは，無数のストリートギャングたち。ビルの屋上，入りくんだ路地，地下鉄の出口，マンホールの中からスネークに襲いかかる。孤立無援，虚しき闘いに満身創痍となったスネーク。

彼はやっとの思いで，“ジプシーズ”のアジトにたどりついた。デュークは

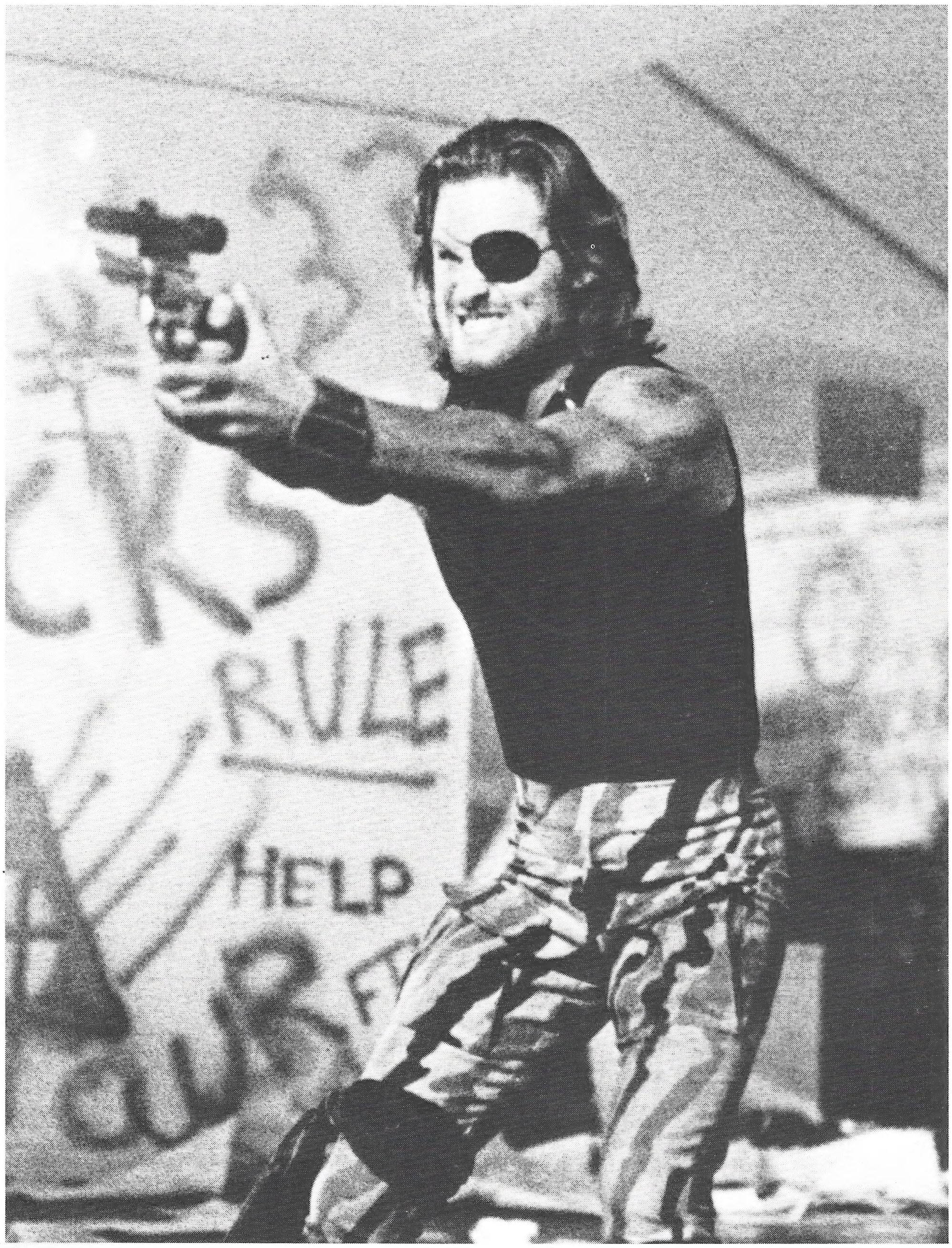




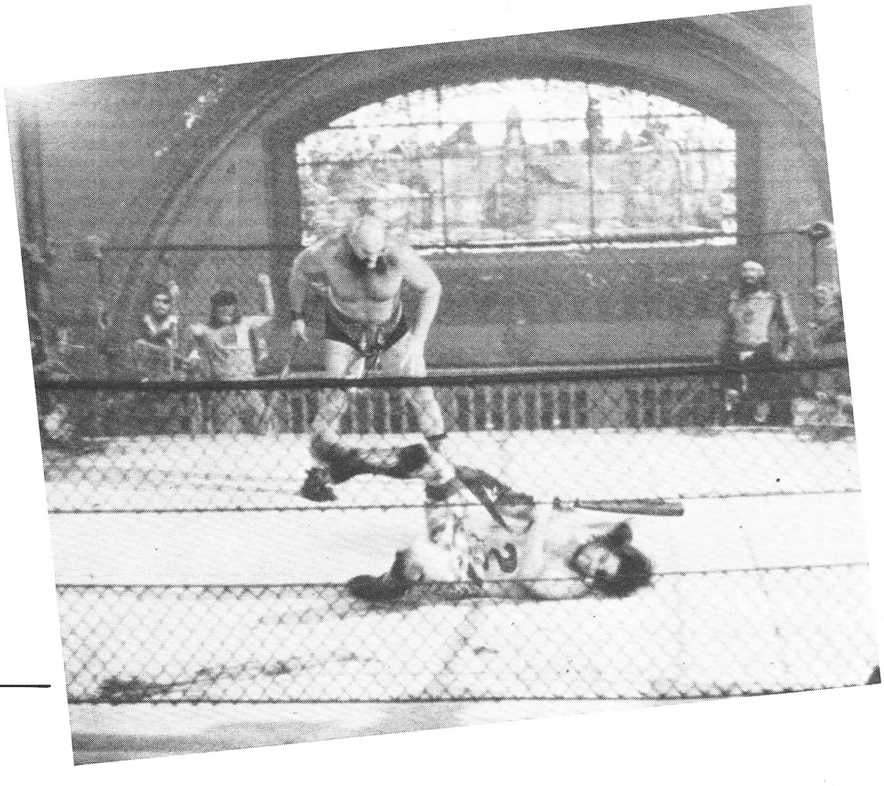
彼をマジソン・スクエア・ガーデンのリングに引き上げる。いま，まさに，目をギラつかせた囚人たちの観衆の中，デスマッチが始まろうとしていた。武器はクギを打ち込んだバット。相手はサディスティックな大男。ゴング。轟々と湧き起こる怒号と歓声。骨を打ち砕く鈍い音。絶叫………。巨漢は身を躍らせ，マットに沈んだ。

時は無情に刻まれてゆく。スネークは，タクシードライバーの囚人キャビー（アーネスト・ボーグナイン），デュークから寝返ったブレイン（ハリー・ディーン・スタントン），その情婦マギー（アドリエンヌ・バーボー）らの協力を得て，大統領を“ジプシーズ”の許から救出するのに成功した。次はマンハッタンからの脱出だ。

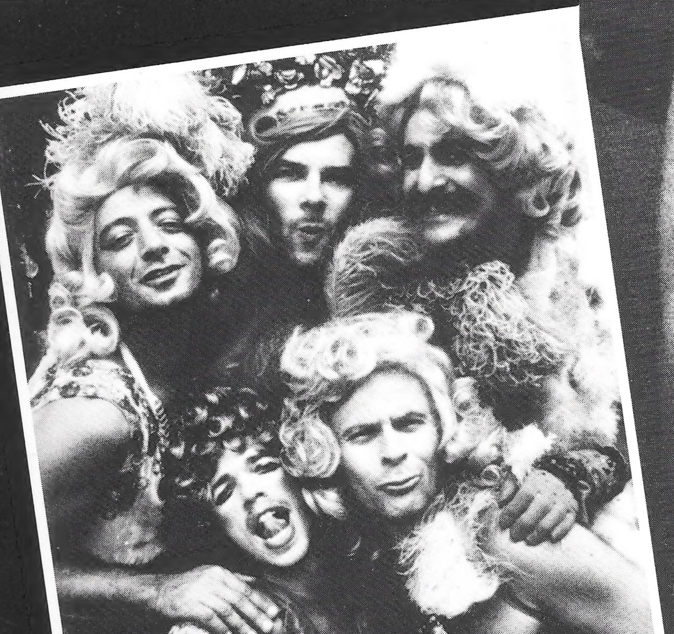
追いすがるストリートギャングを振りきり，2人は最後の壁に挑んだ。その瞬間，スネークは何者かによって引きずり降ろされた。またしてもデュークだ。スネークとデューク。2人の暗黒の帝王は最後の死闘を繰り広げようとしていた。だが，もはや時間はない………。





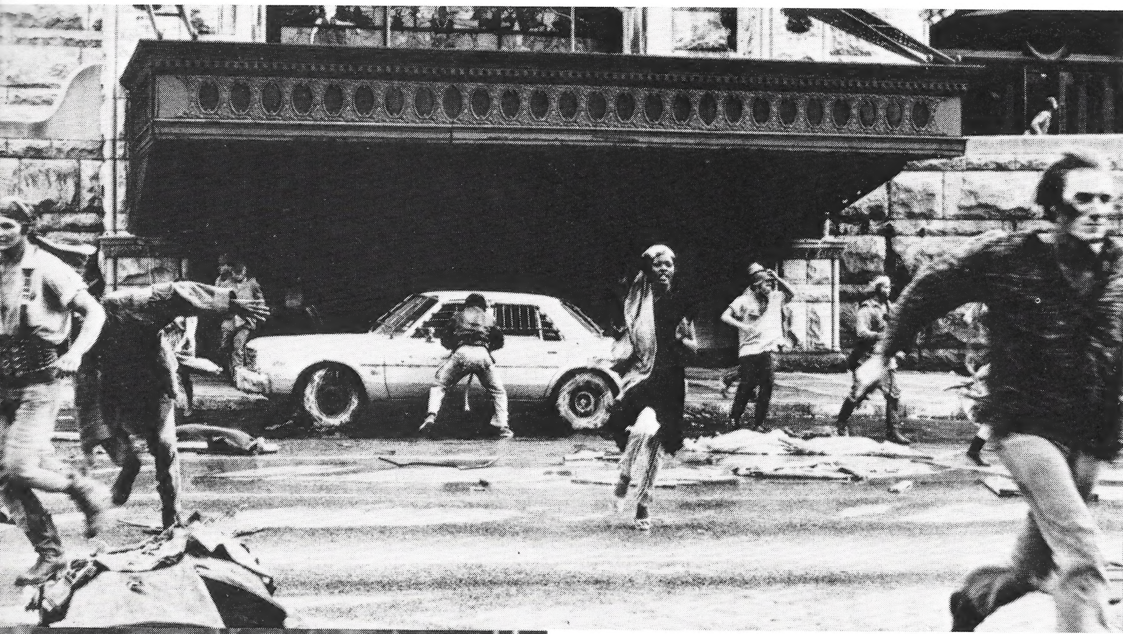






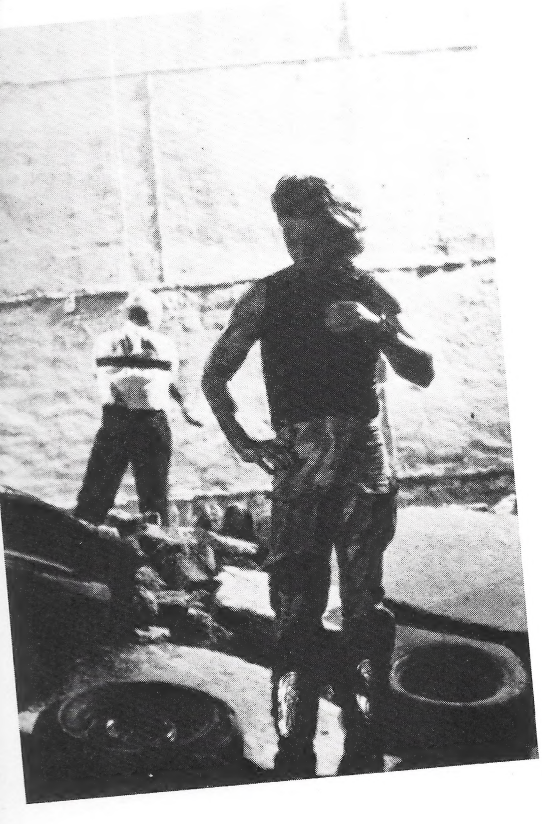






空想と現実が奇妙にまじりあう ──ジョン・カーペンターの才気



この映画，ジョン・カーペンターの監督だから，というので見にこられたかたも多いと思う。ぼくはいままでに公開された作品のなかでは「ザ・フォッグ」がごひいきなのだが，先日おくればせながら最初の長尺作品「ダーク・スター」を見る機会を得て，ますます惚れこんだ。一隻の宇宙船のお話だが，ユーモアたっぷり，詩情もただよい，たいへん知的なつくり方をした佳作だった。

いうまでもなく，彼はスティーヴン・スピールバーグ，ジョン・ランディスと同世代で新しいアメリカ映画の若い担い手の一人である。脚本はもちろん音楽も自分でつくるという多彩な才能の持主で，エルヴィス・プレスリーを描いた「ザ・シンガー」のようないわばストレートな作品も手がけているが，本領はやはり空想的あるいは幻想的な作品にあり，それがＳＦや恐怖劇や怪奇劇のかたちであらわれる。今度の作品は，ひと口でいえば，未来社会テーマのサスペンス・アクションであるが，空想と恐怖が支柱になっている。

その空想の所産である物語の設定が，まずなによりも面白い。今日のニューヨークにおける犯罪発生率は異常に高い。このままだとどこまで荒れるかわからない。それなら思いきってマンハッタン全島を刑務所にしてしまえばよろしかろう，という痛烈な諷刺を含めたこの奇抜な空想には，うれしくならずにはいられない。自由の国アメリカの象徴である自由の女神が鉄条網をからめた監視塔にされてしまっているなど，まことに皮肉である。

未来社会を描いた映画には，食糧危機とか閉ざされた管理社会とか，固苦しいテーマの作品が多い。が，今度の作品はもっとくだけた冒険アクションである。現代文化の頂点にあるニューヨークが荒廃して摩天楼のジャングルと化してしまうという未来国には，文明批判的な興味もあるが，ぼくたちにとっては，あの憧れのブロードウェイがゴミ捨て場みたいになっている光景が，理屈を超えたショックになるのである。

マンハッタンはハドスン河の中洲みたいな島である。もう馴れっこになっているせいか，ぼくたちは島であるこ



映画評論家　双葉　十三郎

とを意識しない。が，気がついてみると，なるほど外界とはすべて橋で結ばれている。そのすべての橋を，地雷を敷設し塀でふさぎ，遮断してしまえば，完全な孤島と化すわけである。まさに盲点を衝いた着想というべきで，これがこの作品の面白さの前提になる。

その孤島化され荒廃したニューヨークの描きかたも面白い。住民である囚人たちは現代文明からきりはなされてしまっている。電灯もなく，タイマツを使い，まるで中世の貧民窟のような風景である。その中世的な世界へ外部からヘリコプターが飛んでくる。カート・ラッセルの主人公は「スター・ウォーズ」に出てくるような銃器を使う。そこで，中世的で暴力的なある惑星を舞台にした宇宙冒険活劇のような印象が生れる。

古い時代と現代を超えた時代のカクテルは他の面にもあらわれている。たとえば主人公のスネークは海洋時代劇でなつかしい独眼竜の海賊スタイルである。演ずるカート・ラッセルは，「ザ・シンガー」でディズニー映画のコメディに出演していたときと別人のようなイメージ・チェンジをしたのにつづいて，この作品ではさらに違ったキャラクターに変貌しているのにびっくりさせられた。二本も続けて出演させているところをみると，カーペンター監督は彼がごひいきになったらしい。などと冗談はともかく，この海賊スタイルの主人公が，リー・ヴァン・クリーフの所長の特命で，誘拐された大統領の救出にでかけるのは，東側にいる要人を西側へつれ出す現代スパイ・アクションを連想させる趣向で，さらに出発のとき，途中で命令にそむいて逃亡するといけないので，24時間ぎりぎりまでに帰ってこないと死んでしまうという物騒な注射をされるのは，ＳＦ的な味つけである。カーペンターとニック・キャッスルは脚本を書くとき，あの手をいれようこの手もまぜよう，と大いにたのしんだのではないかと想像される。

敵地に潜入して誰かを救い，厳重な警戒網を突破して脱出する。というのは，戦争アクションやスパイ・サスペンスでおなじみの（型）である。この映画もストーリーからすればこの型の応用といえる。が，主人公が活躍する現場は型破りの異様さである。

ひと口でいえば，そこは暴力と凶悪がすべての都会のジャングルである。デス・マッチやグロテスクなショウをたのしむ野獣のような連中がひしめく世界である。この春公開されたウィリアム・フリードキン監督の「クルージング」に出てくるハード・ホモの酒場を連想させる異常な恐怖感にあふれている。また一昨年公開されたウォルター・ヒル監督の「ウォリアーズ」の幾組もの暴力グループがつぎつぎに襲いかかってくる恐怖描写を連想させるショックとスリルがある。廃墟のようになったニューヨークという設定は空想だが，演出される恐怖やサスペンスは非常に現実的である。その奇妙なまじり合いが独自の面白さになる。

アイザック・ヘイズ扮するデュークは，いわば闇の帝王である。マンハッタン島にとじこめられた３百万人の囚人の支配者である。ニューヨークが黒人たちに支配されるというのは一つの皮肉な予言のようにも思えるが，ともかくそんなきわめて凶暴な一味が支配する世界にもぐりこんだ主人公にはどんな危険が待ちうけているかわからない。そこがドラマのポイントになる。比較的マトモな人間性を感じさせるのは，アーネスト・ボーグナイン扮するタクシーの運転手キャビー。ハリー・ディーン・スタントン扮する知的な人物ブレイン，アドリエンヌ・バーボー扮するその愛人マギーの三人で，スネークはこの三人を味方につけてドナルド・プリーゼンス扮する大統領の救出作戦をすすめる。が，この三人はいつ裏切るかわからない。それがまたサスペンスの要素になる。

24時間以内に脱出しなければならないという時間との競走もサスペンスの要素であるが，ただ大統領を救出するだけでなく，大統領が世界に発表して点数をかせぐための重要な材料を吹込んだカセット・テープもまたサスペンスの小道具になる。しかもこの小道具はラストの主人公の権力に対する愉快なシッペ返しに画竜点晴的な役割を果たす。

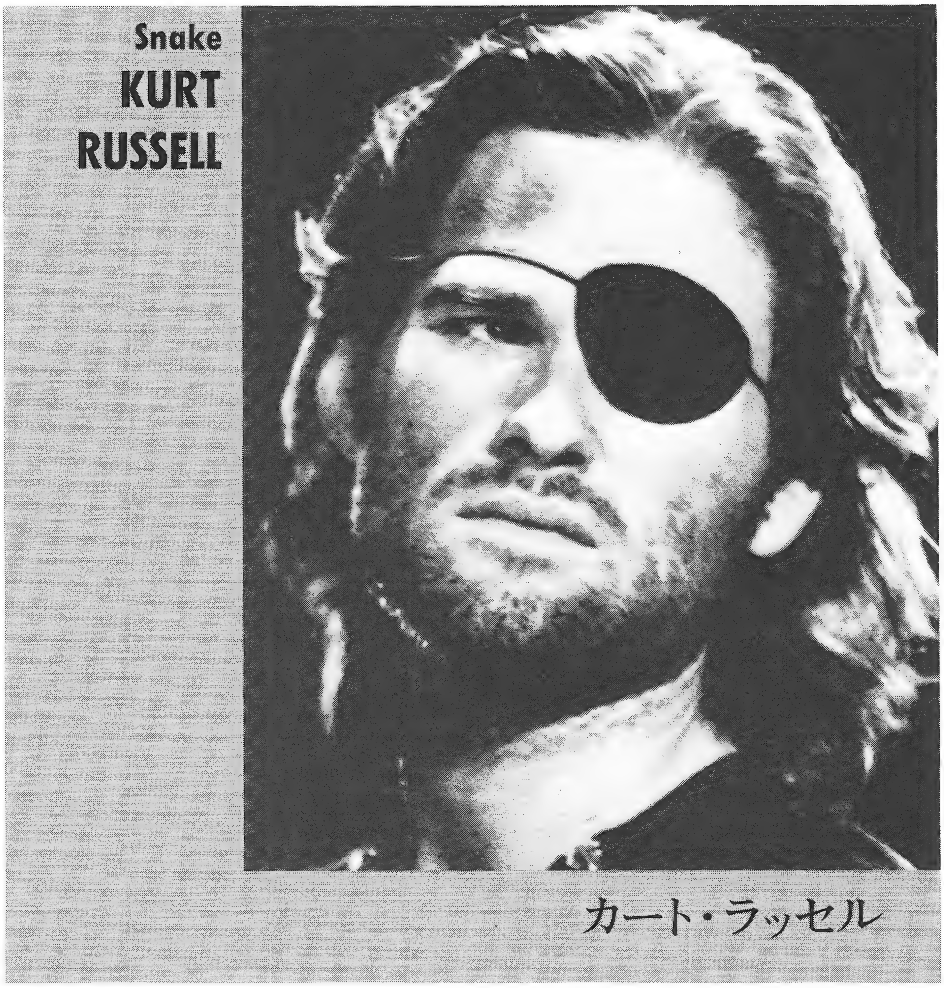
大統領をつれてデュークの巣窟を出たところからは，逃亡と追跡の直線的なサスペンスになる。ここではおなじみカー・チェイスの趣向も盛られている。すでに触れたように，この作品は発想からしてすこぶる皮肉であるが，その皮肉さにはパロディの要素も含まれており，いままでのいろいろなジャンルの映画のパロディと解していい場面がすくなくない。このカー・チェイスもその一つとみてよく，地雷原を突破するのも戦争映画のヴァリエーションといえよう。そして最後につき当る高い壁は東西ベルリンをへだてる壁を連想させる。ジョン・カーペンターの才気は，いよいよ幅広く発揮されはじめたようである。







マイクでつづるスタッフキャストの素顔と製作エピソード



カート・ラッセル



全米大学ラジオ局のための特別インタビューより

——エルビスの映画『ヤング・ヤング・パレード』に9才の時に出演して以来,カート・ラッセルは数々の映画に出演してきました。この『ニューヨーク……』を監督したジョン・カーペンターが,エルビスの生涯をテレ・フィーチュアに収め,そこでのラッセルが大評判をとった,というのも因縁めいています。

カート?　この『ニューヨーク……』は近未来の映画だと言っていましたが,その辺のところを話してくれませんか?

ラッセル「アメリカの犯罪率が400%にまで達したら,恐らくこんな風になるでしょう。そして,アメリカの刑務所が犯罪者を収容しきれなくなったら,これまた起こりうる話です。ニューヨークの街全体を壁で囲い,刑務所にしてしまったら,どんな犯罪を犯そうとも,一生をそこで暮らすことになるでしょう。一巻の終わりですよ。大統領を乗せた飛行機がテロに会い,ニューヨークに不時着する。政府は大統領を救出せねばならない。政府は救出部隊を派遣するが,すでに大統領が人質にされていることを知り,手を出すことができないでいるのです。しかし,サミット会議が始まろうとしているため,24時間以内に彼を救出せねばなりません……。あなたならどうしますか?そこで警視総監が頼みにした男がいます。彼は生き残りのプロです。彼は現在いる中で最も屈強な兵士,しかも傭われ兵士で,何が起ころうとものともしません。死にたいと願ってるからではなくて,実はその逆であり,生き残りたいと心から願っています。では,何のためにやるのでしょう?　その秘密は彼にしか判りません」

——この映画は,アクション映画ですか,それともアドベンチャー,あるいはホラー・ムービーですか?

ラッセル「この映画が,その裏に強いメッセージを持っていることは感じま

すが，それを判断するのは見る人たちです。映画の撮影が始まると，我々は意識して，裏のメッセージを理解しようとはつとめません。あるのは判りきっているからです。ただ映画を撮影し，ただ撮影という肉体労働に身を任せるのです。だから夢があるし，それが，映画作りというものです。その裏に何を感じさせることができるか？　――映画が撮了すれば，おのずと独特の色が出るでしょう。裏に何を感じさせるかは，映画の色で決まるのです。この映画にも色があります。いくつかのメッセージはギラギラとした色調で訴えられますが，明らかにそれは本当の所のメッセージではありません。つまり，そのギラギラもその程度におさえてあるのです」

―――この映画であなたは“スネーク”というキャラクターを演じていますが，どんな役どころなんでしょうか？

ラッセル「この男は，それまでに大銀行から数えきれない程のクレジット・カードを盗み，警察に摑まり，刑務所に入れられていました。これから，一生を刑務所の中で過さねばならないという時に，交換条件を出されるのです。私が思うに，彼にとってニューヨークは，たまたまニューヨークだったのです。シベリアだろうが，ニューヨークだろうが，彼にとってはどうでもいい。ただ，彼がニューヨークに飛び込んで行ったのは，刺激を求めていたためです。彼はその日その日を生きてきた男。だからこれからも生き残って行くでしょう。つまり，悪運の強い兵士です。兵士と言っても傭われ兵士タイプですが，犯罪王であり，誰にも負けない根っからの兵士なのです。大変危険な男ですし，粗暴極まりない男ですが，何かがある。それは映画が終わりに近づくにつれ明らかになって行くと思いますが，その何かがはっきりとは判らなくとも，映画のラスト辺りではこのキャラクターの気持ちが判るような気になるでしょう」

―――この役を引き受けた理由は？

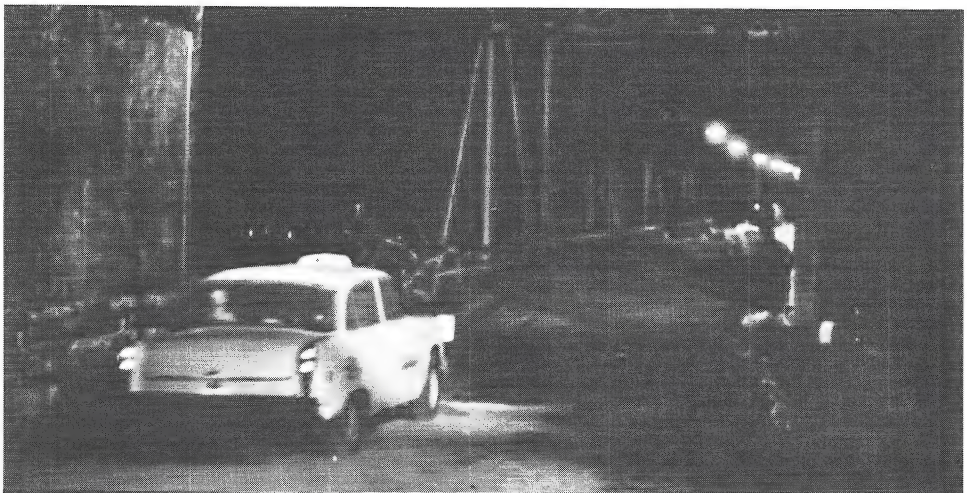
ラッセル「おもしろいと思ったからです。キャラクターとしてね……誰でも，こんな人間になれたらな，と思うことがあるでしょ？　このキャラクターにはそれがあったからです」

―――この映画には，アクション・シーンやスタント場面が多いようですが，ご自分でスタントなさったんですか？

ラッセル「僕とスタント・マンとでやりました。相当危険な所もあり，一人ではシンドいので……窓をつき破ったり，車に飛びのったり，格闘シーンとか，釘のついたバットを振り回したり，逃走する車が爆発したりとかね……色色やりました」

―――バイオレンス作品が好きだという記事を目にしましたが，いつごろからですか？

ラッセル「9才の頃，よく，屋根から飛び降りたり，死ぬ真似をしたり，水鉄砲とか，顔にケチャップを塗ったくって遊んでいました。好きだったんです。今でもそうです。そういうのを見るのも好きですし，そういう映画も好きです。とにかく，恐がったり，驚いたり，勧善懲悪みたいな物を見るのが好きなんです」











——この『ニューヨーク……』で威圧感のある刑務所長を演じるリー・バン・クリーフが，役者として活躍を始めたのは，戦後まもなくで，以来，数々の名“悪役”ぶりで知られています。『ミスター・ロバーツ』，『マーベリックの黄金』，『真昼の決闘』などなど……まさに，“役者の中の役者”と言うにふさわしい活躍ぶりです。

リー？　悪役でやって行こうというのは，ご自分で決心なさったんですか？

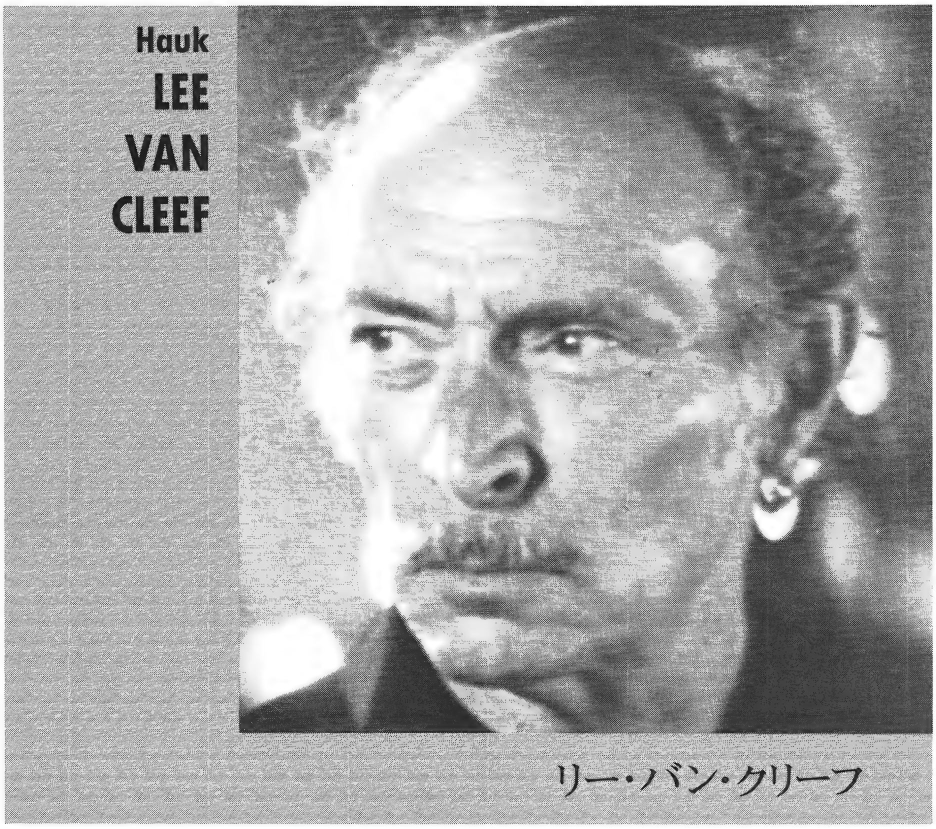
リー「決心なんていう大ゲサなもんではなく，役者としてやって行くということさえフラフラしていたもんですから……ただ，たまたま，舞台の『ミスター・ロバーツ』で演ったマニオン役が乱暴者（タフ・ガイ）でしたからね……不思議なもんで，15ケ月も同じ役を演っていると，その役になり切ってしまうんです。一週間に８公演もやってごらんなさい，役がのりうつってしまいますよ。『真昼の決闘』の敵役が入ってきたのは，その後のことです。これはやりがいのある仕事でしたね，やっぱり……必ずしも自分とは同じ人間ではありませんでしたが，たまたまですよ…。それからというもの，ハリウッドでは次から次へと敵役が舞い込んできました……タイプ・キャストですがね……。」

——敵役というのはどんな気分です？

リー「一番楽しいですね。普段やれないことがやれるんですから……遊べるっていう意味じゃないですが，楽しめる部分が多くってね……何故楽しいかと言うと，普通のまともな役よりもしなければならないことも多いですから，そう冒険って言うのかな，だからだと思いますよ…。嫌われる役であればあるほど人間的とも言えますね」

——『ニューヨーク……』のボブ・ホークというのはどんな役がらですか？

リー「悪役というのではなくて，ただタフな男の役です。唯一，悪役的な要素と言えば，カート・ラッセルが演じている役に予防注射を射たせるのですが……つまり，危険な区域に行くためには細菌やバクテリアの予防も必要だとかなんとかうまいこと言って……しかし，彼の動脈の中に，二発の爆薬をしかけたことが後で判るのです」



リー・バン・クリーフ

——イヤリングを一つだけしておられますね。どうしてですか？

リー「色々な文化に対する尊敬からです。海軍にいた頃から始めました。それをしながら世界中を股にかけてね……1942年から46年の間かな。それ以来，つけたり外したりしています。2，3本前の映画から，またつけるようになりましたが，監督とかプロデューサーがそれに目をつけて，映画に出る時もつけてくれなんて言うもんですから……今度は，イヤリングをつけた刑務所長です」

——クリント・イーストウッドとイタリアの一連の“マカロニ・ウェスタン”に出演して，注目されましたが，その辺のいきさつをお聞かせ下さい。

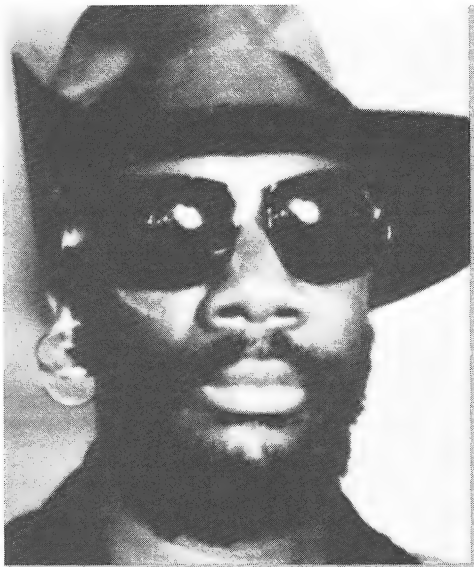
リー「“ローハイド”のロディ役は彼にぴったりだったと思います。それ以後『荒野の用心棒』まで彼は殆ど他に出ていない筈です。それから，私が彼の家へ引っ越した時期があり，『夕陽のガンマン』で共演しました。次が『続・夕陽のガンマン』。イーライ・ウォラックとでトリオということになりました。この辺の映画が，次へのはずみになったのです」

——『真昼の決闘』ではゲーリー・クーパーと共演していましたが，何か彼について覚えていることは？

リー「クープ(クーパーのこと)は，物静かで，気安く，素晴らしい人でした。毎日セットに顔を出し，誰とでも話すような人でした。あき時間には，皆と話して，決して人をさけるようなところはありませんでしたから，こちらの方がひけ目を感じましたよ。エキストラなんかにも話しかけたり，とにかくセットにいる人間となら誰とでも話しましたね。人からしたわれ，彼もそれを知っていたようです。

——では，最後に……『ニューヨーク……』は，ジョン・カーペンター監督の近未来のヴィジョンを描いたものですが，あなたにとって，この映画の持っているメッセージは？

リー「彼は我々に，気をつけろ，起りかねないぞ，と訴えかけているのです。それ以外のメッセージはないように思います。今のままでいったら，とてもじゃないけど，これから先どんなことが起るか判ったもんじゃない。刑務所の一つの形をかりて，世界の未来の方向性を示しているように思えます」



Duke
ISAAC HAYES
アイザック・ヘイズ

———アイザック・ヘイズは，長年，ソウル・ミュージック，そして映画音楽の王者として君臨してきました。ヒット曲『ソウル・マン』，『黒いジャガー／シャフト旋風』のテーマ，そして最近のヒットでは『恋のデジャ・ブ』があります。21枚のアルバムのうち,10枚がゴールド・ディスク，５枚のプラチナ・ディスクを記録しています。

音楽ばかりでなく，役者としても活躍しており，三本の映画出演，ＴＶシリーズ“ロックフォード・メモ”にも出演しています。

アイザック？　この『ニューヨーク……』では，どんな役を演じているんですか？

ヘイズ「悪役なんだけど，楽しくってね，気になんないよ。おもしろい役だし，インパクトも強いから，俳優としての新しい可能性を試すいいチャンスだったと思う。役の名前は公爵でね，ニューヨークの公爵（デューク）……つまり，全てをとりしきってる男です。その公爵に出会ったら，大変なことになる，そんな設定です。何度も言うけど，楽しかった。絶大な力を持ってて，その名前を出しただけで，大の大人がふるえ上がるなんていう役は，魅力ですね」

———その公爵（デューク）が，このストーリーの中でどんな風に描かれているんですか？

ヘイズ「ニューヨークは,流刑の地です。300万人近くの凶悪犯が野放しになっていて，まるで生存競争みたいになってる。誰も中には入ってこないし，食料だって空から落とすもんだから，早い者勝ち。デュークはそんな世界に君臨している男で，自ら徒党を組み，何でも手に入らない物がない。だから，生き残って行くために必要なものは全て手に入るし,羽振りをきかせている。デュークの描かれ方といったら，そんな所かな……何かが起るとすぐに現われ，自分が放免されるために機会を狙っているという設定です。

———見ると,滅入るような映画ですか？

ヘイズ「アクションたっぷりだし，とにかく楽しいから，滅入ることはないと思う。チェイス場面もあるし,サスペンス一杯で，一度見た人が次の人に見に行けよ，って勧めるような映画だと思う。一度見だしたら,一気に見てしまうような映画だね。コスチュームも凄いし……こんな映画は前になかったと思う。違うんだ。一つだけ確かなのは，今までにはなかった映画ということ」

——— ジョン・カーペンター監督は，映画音楽をご自身で担当なさいますし，あなたも並外れた音楽の才能をお持ちです。お二人で音楽の話などなさったんですか？

ヘイズ「音楽の話はしました。映画音楽のこととか，色々と……彼の映画は全部見ているんですが，どれも効果的に使われていますね。だから，あえて音楽でかかわろうとは思いませんでした……彼自身いい物を持ってるのに，やぶ蛇ですからね……彼には音楽のことが一番判ってるし，作曲ってのもどういうことか判ってます。それは感じます。彼にとって音楽は，お腹の中にいる子供のようなもので，だから少しばかり音楽論議をする程度におさえて，口ははさみませんでした。僕の一番の関心事は，演技でしたし，彼もそれを望んでいたんです」

———音楽界というのは，色々と浮き沈みの激しい世界のようで，あなたもその波にもまれている訳ですが，その辺のところを……

ヘイズ「色々なことがあっても,大衆の前から姿を消すことはなかったつもりです。僕たちのような職業にはままありがちなことですが，僕は常に前向きでいたい。メンフィスで僕の曲の何曲かを競売にかけている時でも，僕はアトランタのスタジオで，新しい企画のためにレコード作りをしていた位です。気になりませんでしたね。一番気にかかることと言えば，アイザック・ヘイズを見て，あんな風になりたいって言うような子供たちのことです。僕がカムバックしなければならなかったのも，そのためで，あなたがもし子供たちの夢をになっていて，落ち込んで二度とカムバックしなかったとしたら，彼らの夢が壊されてしまうことだってあるんですよ。それが，責任っていうもんです」

———下降線を辿った原因があるとしたら，それはどの辺のところなんでしょうか？

ヘイズ「商売の面を考えてた人間を，間違って信用してしまったからでしょうか……僕が商売を苦手とするのは，退屈だからです。でもいい勉強になりましたから，これからは何があるのかちゃんとこの目で確かめ，それを管理するようつとめようと思います。なぜなら，あなたは信頼に足る人だとしても，次の人が必ずしもそうとは限りませんからね。つまりそういうことなんです。商売を自分でやるといっても，レコード会社の中は戦争です。さんざんひどい目に会わされました。計理士や弁護士にも痛い目に会ったけど，レコード会社の方はもっとですね……。」

———では最後に，『ニューヨーク…』の後の，出演計画などを。

ヘイズ「もっとシリアスな役が,と言うか,感情なんかが剥き出しになるような役が演ってみたいですね……ほっとするシーンもあっていいし，悲しいシーンがあってもいいけど,怒りというか，諸々の気持ちがほとばしるようなシーンがいいね……何でも挑戦です。消耗するのは覚悟の上だけど,やってみたいですね…」

———アドリエンヌ・バーボーは，TVシリーズ“Maude”で5年間，皮肉屋の娘キャロルを演じ，また，ブロードウェイでは『屋根の上のヴァイオリン弾き』，『グリース』にも出演，ラス・ベガスではロイ・クラークとステージを共にした経験もあります。

今，彼女のエネルギーは専ら映画の方に向き，監督であり，ご主人でもあるジョン・カーペンターの良き伴侶として活躍しておられます。

アドリエンヌ？　この映画でのあなたの役どころは？

バーボー「刑務所の囚人の役です。ヤクザの情婦で，パイソン357を手にすれば，ただバンバン射ちまくって，天国にいる気分になれるような……」

———どんなリサーチをしましたか？

バーボー「357の射ち方を勉強しました。最初はちょっとどうしていいか判らなかったんですが，二日目に射撃訓練をしに行って，ガンを手にし，標的を撃ち，弾丸をこめてからまた撃つといった具合に，始めたんです……とても印象的で，銃を撃つなんて，とっても変な感じでした……。リアリティをつけるため一枚の紙に向けて撃つんですから……つまり，もし人間に当ったら，それこそ命はないわけでしょ？とても動揺しました。」

———映画の設定では1997年ということになっています。どんな服装に？

バーボー「未来の話でしょ。だから，どんな風にもやれるんです。基本的には後もどりという感じかしら，……アイザック・ヘイズは，モーニングみたいな古めかしい礼服を着てました。私の服はちょっと色っぽくて，その上にミリタリー・ジャケットのようなのをはおって……髪はボサボサ，大概は不潔っぽい感じで……マンハッタンのごみ溜めみたいな所をみんな走ったり，ころんだりという感じでした。マニキュアは銀色。電池を溶かして，クロームを取り，多分，鉛のような物だと思うけど，銀色のものをとって，爪に塗るんです。爪を武器にするためにね…」

———殆どの撮影はニューヨークで？

バーボー「ニューヨークで撮った部分とロスで撮った部分，それとセントルイスもあります。第一に器材運搬の関係でね……映画の大半は夜間撮影が多かったのですが，島の中では電力も供給できないし，高いビルがあったり，照明のことやその他もろもろで，マンハッタン（島）の部分部分をそのまま撮影することはできなかったんです。だから，実際には，セントルイスの一部を使ったり，セントルイスで撮った駅なんか，グランド・セントラルと瓜二つだったように思います。もし似ていなくってもそれはそれで素晴しいんです」

———ニューヨークでは，どんな所をロケ地に？

バーボー『リバティ・アイランドでロケしました。自由の女神像を中心に……最初にそこの許可がおりた時，プロデューサーが許可を貰ってからすぐ後ですが，爆薬使用のシチュエーションなので，撮影許可がおりるかどうか，皆ハラハラして待ってました。あの街は実に寛大で，中に入ってもよろしいという許可がついにおりました。そこで，皆して，その中を見聞しました。自由の女神像は，島全体を監視する大監視塔という設定です。有刺鉄線などの必要は全くないわけです。それ自体が島ですから，他から守られているし，自然の利がそのまま使えるわけです」

———映画の脚本，監督の他にも，ご主人のジョンは音楽まで担当なさっています。音楽の才能についてお話し下さい。

バーボー「譜面は読めないし書けないので，耳を頼りに，……何か思いつくと，すぐにピアノの前に行き，鍵盤に向かっています。それで結局はスタジオに行って，誰かと一緒に，ムーグ・シンセサイザーをいじくったりして，好きなようにやってるみたいです。たとえば，ここはストリングスがいるなとか，ここはトランペットだなとか，ここをもっと大きく，ビートをつけてとか……それで友達がムーグにそういうのをプログラムするんです。「ハロウィン」なんかでは，“ボーリング・グリーン・フィルハーモニック・オーケストラ”とか名づけていましたが，あれ，実はジョンとスタジオのムーグ・



Maggie
ADRIENNE BARBEAU
アドリエンヌ・バーボー

シンセサイザーのことなんです」

———お二人が会ったのは，どういうきっかけで？

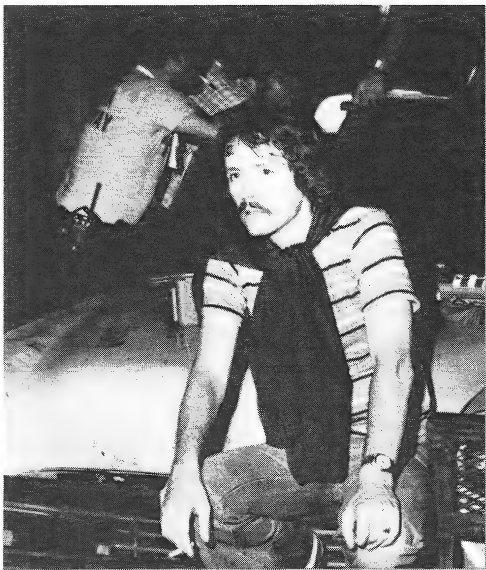
バーボー「ジョンは“Maude”を見て，私のことを知っていましたから，この映画の中に私のキャラクターを入れてくれたのです。個人的に知り合う以前は，仕事場が一緒だというだけでした」

———その後，何年も結婚には反対だったようですね。どうしてですか？

バーボー「私の両親が結婚で失敗しています。最終的には結婚，というのが恐かったのです。…私にとって結婚とは，全ての始まりではなくて，全ての終わりという気がしていました。これは私自身の怖れでもあり，先入観念でした。結婚しなければ，社会の一員になれないという考えは持っていませんでした。これはジョンも同じで，その気持を打ち明けられる人，それがジョンだったのです。それに，仕事の方が大切で……」

———仕事で思い出しましたが，ジョンの仕事の手伝いなんかもかなりするんですか？

バーボー「時々……台詞を書くのにつまった時なんか……こんなシチュエーションだったら君は何て言う？なんて…」



Directed by

JOHN CARPENTER

ジョン・カーペンター

――――『ニューヨーク1997』はジョン・カーペンター監督の7本目の作品です。USCの映画科に在学中，『ブロンコ・ビリーの復活』で1970年アカデミー短編賞を獲得。その他，『ハロウィン』（自主製作としては最高の配収をあげた），『ザ・フォッグ』，『要塞警察』などなど………。

ジョン？　『ニューヨーク………』のオリジナル・アイディアはどこから来たのですか？

カーペンター「ニューヨークに来て，『狼よさらば』という題名の映画を見てからです。人がやったことのないような，ニューヨークを舞台にした映画が撮れないものかって　……6年前の1974年に脚本を書いて，今まであたためていました」

――――この映画はニューヨークを否定的に扱っているようですが，ニューヨークは嫌いですか？

カーペンター「嫌いというのではありません。ただ，島の地理条件からくるおもしろい設定が浮かんだから……ただ，それだけです。ここで外界とのつながりを断つのは，意外と簡単なんです。ニューヨークと外の世界をつなげているのはいくつもの橋とトンネルです。ボン！てな具合に，そいつを断ち切ったら，この映画みたいになるワケです」

――――『狼よさらば』が，どんな風にこの映画に影響を与えたのですか？

カーペンター「ニューヨークの厳しさ，社会とか暴力の熾烈さ，そういった物を未来という枠の中にぶちこんでみたかった。全てがギスギスしてきた状況で，本当にはどんな事が起こるのか？ということです。しかし，ユーモアたっぷりなところもあって，最初の稿よりはずっと軽い仕上がりになってますから，中にはちょっと今ではチグハグなところもあるかもしれませんが，バランスの面では丁度いいのです。つまり，ハードな面ばっかりではね，どうも…」

――――今までに大変恐い映画を何本か撮ってこられましたが，観客をひきつけた要因は何だと思いますか？

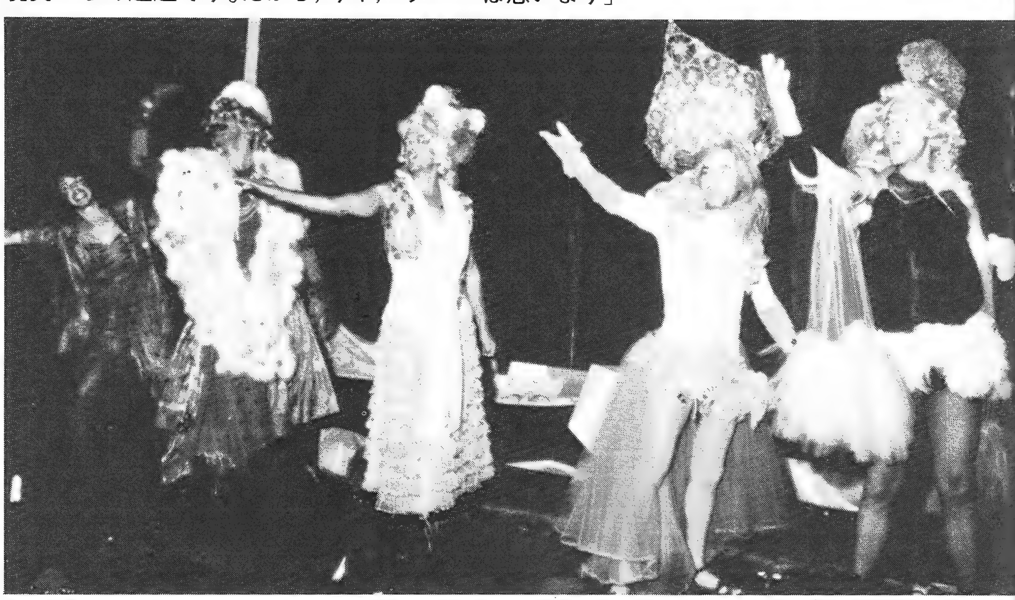
カーペンター「映画史をひもときますと，ご存知のように，そういった類いの映画が生まれる背景には，ある社会的状況があります。そういう映画にはけ口を求めるような社会の要素があります。たとえば，50年代ですが，ＳＦ映画がさかんに作られましたし，恐怖映画も負けじと作られました。原爆ものとか，ＵＦＯものとかも突然現われましたが，これも関係があります。つまり，共有体験なのです。劇場の中で精神浄化をする一つの方法ですよ。現実からの逃避です。だから，今や，リアリティというのは，一番大切な要素ではありません。その一部ではあっても，全体ではありません。映画は，また，遊園地の乗り物のようでもありますね」

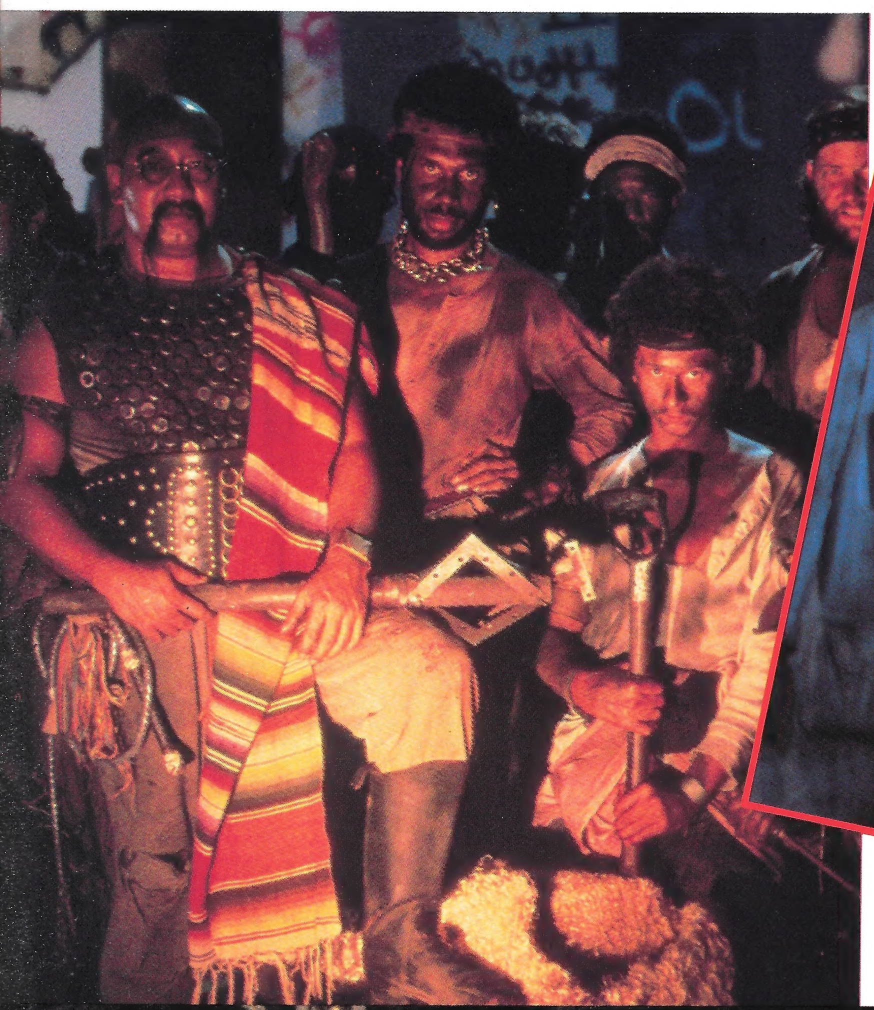
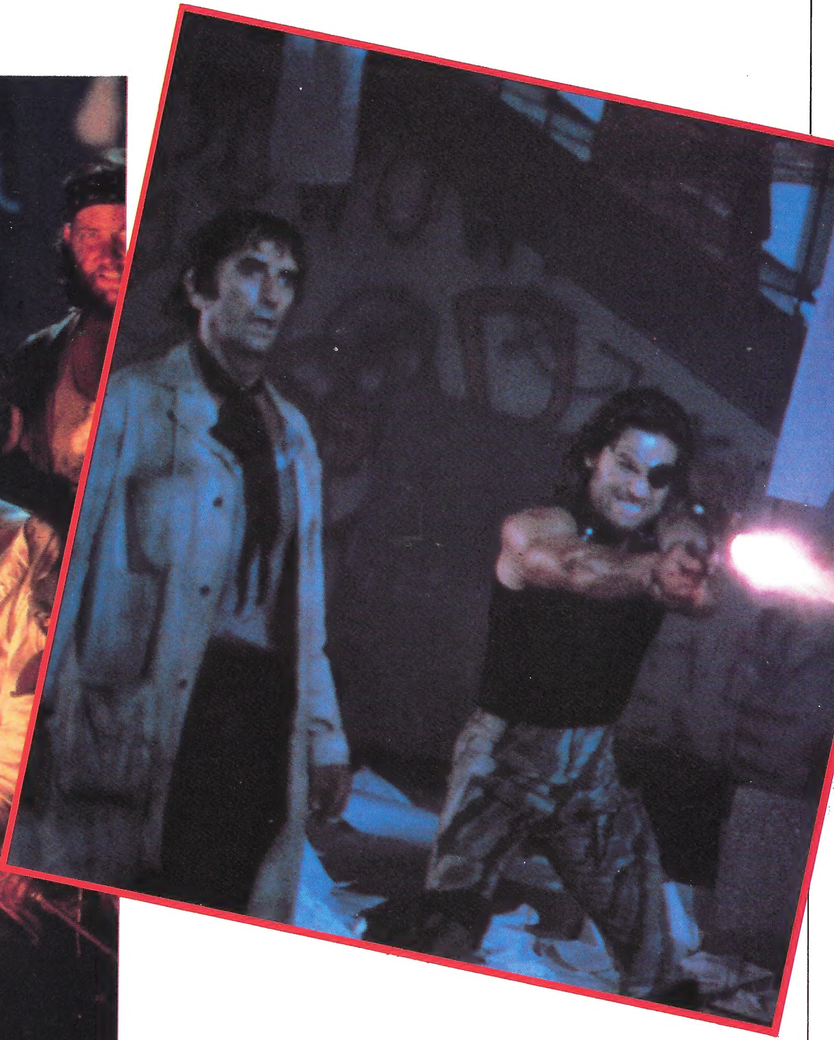
――――あなたはハリウッドに彗星のごとくに登場しましたね。一番影響をうけた人は？

カーペンター「映画科に通い，色々な監督の色々な作品を勉強しました。ハワード・ホークス，ヒッチコック，オーソン・ウェルズ，グリフィスとかでもそれ以後は，恐らく，自分自身の個性や感覚で育ってきたような気がします。大部分，僕の映画は自分だけの発想から生まれています。多少の例外はありますが……」

――――ヒッチコックは，多くの若手映画作家に影響を与えていますね。あなたも例外ではないと思いますが，巨匠から学んだ多くは何ですか？

カーペンター「皆がそこに学んだものは，モンタージュの技法やバラバラのカットを一つにつなげ，それを一つの効果にもって行く構成力だという気がします。一番いい例が，よく使われる『サイコ』でのシャワーのシークエンスです。一人の女性が殺されるというところまでは別に何の変哲もないのですが，よく見ると，本当に短いカットをつなぎ合わせ，見事に一つのムードを出しているのです。あれは，ヒッチコックが映画に持ち込んだ物だと僕は思います」








スタッフ

製　作……デボラ・ヒル
　　　　ラリー・フランコ
監　督……ジョン・カーペンター
脚　本……ジョン・カーペンター
　　　　ニック・キャッスル
音　楽……ジョン・カーペンター
撮　影……ディーン・カンディー

キャスト

スネーク……カート・ラッセル
大統領……ドナルド・プレザンス
デューク……アイザック・ヘイズ
ホーク……リー・バン・クリーフ
キャビー……アーネスト・ボーグナイン
ブレイン……ハリー・ディーン・スタントン
マギー……アドリエンヌ・バーボー
モーリン……シーズン・ヒューブリー

STAFF

Produced by ……**DEBRA HILL**
LARRY FRANCO
Directed by ……**JOHN CARPENTER**
Written by ……**JOHN CARPENTER**
NICK CASTLE
Music by ……**JOHN CARPENTER**
Director of Photography ……**DEAN CUNDEY**

CAST

Snake ……**KURT RUSSELL**
President ……**DONALD PLEASENCE**
Duke ……**ISAAC HAYES**
Hauk ……**LEE VAN CLEEF**
Cabbie ……**ERNEST BORGNINE**
Brain ……**HARRY DEAN STANTON**
Maggie ……**ADRIENNE BARBEAU**
Maureen ……**SEASON HUBLEY**



昭和56年５月22日印刷
昭和56年５月23日発行
©
発行所　東京都千代田区有楽町1—2—1　東宝株式会社事業部
発行者　東京都千代田区有楽町1—2—1　大　橋　雄　吉
発行権者　東京都港区新橋2—20—15　新橋ビル1号館
㈱ヘラルド・エンタープライズ
印刷所　東京都港区芝2—1—28　成旺印刷株式会社
定価　300円

JOHN CARPENTE'S

ESCAPE FROM NEW YORK

Herald 東宝